

柗の花最小をこゝろぎす

藤田湘子

たとえば男に「何の花が一番好きか」と尋ねても、「柗の花」と答える者はまず居ないだろう。初冬に緑の葉陰に小さな小さな白い蕾を付け、モクセイ科の花独特の香りを放つ。そして、咲き初めの微香はいいのだが、雌蕊が見えるほど開くとやや好ましからざる匂いともなる。

俳句は世界最小の定型詩と言われる。たった十七音。しかし、この音数を埋め秀句をなすには、並大抵の努力や才能だけでは、決して望む結果は得られない。

昭和五十八年十一月。一日十句の修行途上にあつた湘子が、「最小をこゝろぎす」と詠ったのは、これまでの自分の殻を一切脱ぎ捨てようと考えた、決意の表明に他ならない。全身で「俳句になりきれ」と。

1983年 (558.11.29作) 第六句集『一個』 鑑賞・轍郁摩